「多元的古代」研究会・関東

多元 第15号

Oct,1996

TAGEN

発行人◎高田かつ子　編集人◎安藤哲朗　事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方　TEL 044-522-4185

人麿の神と日本書紀の神

人麿と人丸

柿本人麿という人は判らないところがある―その判らないところで大勢の人にご飯を食べさしています。その意味で、偉い人だと思います。

柿本人麿の歌の確実なものは『万葉集』にあります。

ところが平安朝以後の『古今集』・『新古今集』では「人丸」とも書かれて、その歌は万葉集の歌とは合わない、万葉集の歌は無視されています。

七月二十八日
中小路駿逸氏
講演要旨

人麿の生きていたのは、七世紀から遅くとも八世紀始めにかけてだと思われますが、この時期はまた日本の歴史の上でも重要な時期です。

……一般に国の始まりは判らんことが普通で、判っているつもりでもやっているうちに判らなくなってきたりするのですが……、西暦七〇一（大宝元年）という、八世紀の初め、その前の六九七年に文武天皇が持統天皇に位を譲られて即位、日本書紀はここまで書いてあります。

そして文武天皇の即位からが『続日本紀』（『続紀』）に書いてあります。『続紀』のできたのは七九三年、日本書紀ができたのは七二〇年（養老四年）、日本書紀を書いた人たちは人麿の同時代人ですが、できた日本書紀を人麿が見たとは限りません。しかしかなり歴史に対する共通認識があったとすべきでしょう。

「神代」

人麿が歌の中で歴史について歌っています。それと日本書紀の中の歴史と、イメージがちょっと違うのです。

167日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首并に短歌

天地の初の時の　ひさかたの天の河原に　八百万千万神の　神集ひ集ひまして　神分ち　分ちし時に天照す日女の尊　天をば知らしめすと　葦原の瑞穂の国を　天地の寄り合ひの極み　知らしめす神の命と……

この歌は、天孫降臨の話と草壁皇子の話とを重ね合せています。日本神話の主な事件は一、天地開闢・二、天孫降臨・三、神武東征（神武天皇の公式発言に「東征」と言っていますのでそれに倣いますが）となりますが、天孫降臨とは天照大神と高木神（高見結命）が相談して、天照大神の孫を葦原中国の王にしようとして下した、それと天地開闢の時とを重ね、持統・草壁の関係（母・子）と天照大日女とニニギの関係を重ね合わせている。草壁皇子は天下を支配すべき皇子であったが、亡くなった。そして皇子は神であった、といっています。

29（首略）天にみつ大和を置きて　青丹よし平城山を越え　いかさまに思ほしめせか　天離る夷にはあれど　石走る淡海の国の　楽浪の大津の宮に　天の下知らしめしけむ　天

皇の神の尊の　大宮は此処と聞けども……ももしきの大宮処　見れば悲しも

この「大津の宮」は天智天皇のだというのが通説だったんです。古田さんはこれを「日本書紀によれば景行天皇である」といった。確かにそのとおり、はじめに近江に都したのは景行天皇で、成務紀から仲哀まで遷都はしなかった。それが「荒れた」というのです。壬申の乱で天智の近江の宮は滅びますが、その前の近江の宮は荒れたか？これが荒れたんですね。神功皇后が九州から仲哀の死後生まれた王子をつれてクーデターをやっている。それで景行天皇の近江の都は滅びた。この二つの滅亡を重ねている、というのが古田説です。このように人麿の中で複数の事件が重ね合わされる、そして総て「神代」のことになっている、天地開闢・天孫降臨・神武東征・それ以後、総て「神代」なのです。

人麿以外では現在の天皇を神といった例は、4260大将軍贈右大臣大伴卿作という、「大君は神にしませば赤駒の腹ばふ田井を都となしつ」大君は天武のこと、壬申の乱の直後の歌です。とにかく人麿は現在の天皇も昔々の神も一纏めにして「神」と呼びました。しかし彼の死後できた日本書紀では、神武紀の東征発議から以前を神代とし、以後は人代としました。人麿は大盤振舞、書紀はやや値下げしたとも言えるし、人麿が二階に揚げられて梯子を外されたとも言えるでしょう。事によるとある種の政策で、人麿はその流れに乗って、書紀では多少修正されたとも考えられます。書紀では神武東征発議から年代が書かれ出すのです。

日本書紀の書名

『日本書紀』は日本列島の政治史ではないのです。これは大和の一王朝の歴史なのです。持統天皇までの、一王朝の歴史です。本の名前からしてそうです。この書物は、写本には『日本書紀』と書いてあります。一つだけ例外は「日本書紀」と書いてある。まあ、同じことですが。ところが『続紀』には「日本紀ができた」と書いてある。内容から見てこの本のことです。こちらには「書」がない。では「書」はいらないか？いらないならなぜ「書」の字を加えたか？これは必要な理由があるからです。つまり前例があったからです。

国号に「書」をつけた書名は、何を表すか？今まで言った人がいないようなので言いますが、一言でいえば「交替しもしくは並び立った複数の王朝の一つについて書かれた紀伝体の史書である。」史記・三国志・南史・北史などは、二つ以上の王朝に亘って書いてあるから『X書』ではない。漢書・後漢書・魏書・蜀書・呉書・隋書などはそれに当たるのです。「この日本列島において、交替しもしくは並立した複数の王朝のうちの、わが天皇の王朝について書かれた紀伝体史書」、それが『日本書紀』である。そしてその状態は持統天皇の終りまでである。『続日本紀』はなぜ『続日本書紀』ではないか、文武天皇からは一つになっているから。それは交替も並立もしていないからです。

日本書紀ができたのは元正天皇の時代、したがって元明天皇の終りまでは書けるはずですが、そうはせず、持統天皇で終っている。それはそこに切れ目があったからなのです。そこまでは分家筋だったからです。文武天皇から本家筋になったのです。

象の鼻

ウソをつくのにどうしたらいいか。事実に反することを言うのは一番下手な手法で、事実と突合わされればバレます。上手につくには、事実だけを話して一部を伏せます。例えば象のことを言うのに、詳細に正確に象のことを語って、鼻のことだけを伏せます。（笑い）しかも、鼻のことも気付かれないようにそっと出して置く……日本書紀はこんな風に書いてあるのです。巧みに書いてあるので後世の学者が皆だまされている。頭のいい人は一度聞いたら忘れませんから、先生が言わないことは無いと思っている。鼻の無い象が千二百年続きますわ。そこへ古田武彦などという頭の悪い人が「鼻があるではないか」といったのですね。また中小路などというどこの馬の骨とも分からんのが「鼻がある」という。

天地開闢

日本書紀は天地開闢から、それも天地がまだ開けなかった頃、というところから始まっています。

古事記という本も変な本で、太安万呂の上表文、所謂「古事記序文」に和銅五年できた、と書いてあるのですが、『続日本紀』にはそのことが書いてない。また、日本書紀の神代紀には「一書にいわく」としてたくさんの引用文があるのに、古事記からの引用がない。古事記の名を伏せたのでもないらしく、古事記に似

てはいても、ぴったりくる引用文はない。日本書紀にはなぜか古事記は無視されている。

だれも説明できなかったのですが古田さんは「日本書紀ができたら古事記は邪魔になったのだ」といっていますが、確かに邪魔にならない本は盛んに引用しているのです。

本居宣長が『古事記伝』を書いてから、現在まで古事記が持て囃されて、日本書紀は脇に置かれていますが、朝廷が責任を持っているのは日本書紀の方なんですね。少なくとも『続日本紀』に書いて、「ここに書いてあることは責任を持ちます、逃げません」といっているのは、日本書紀の方なんです。

その日本書紀に天地の始まりが書いてある。「ある物ができた」と書いてあります。（つづく）

（まとめ・安藤哲朗）

たろんサロン

多論些論

会員のページ

筆者はいずれも本会会員

韓国・栄山江流域の前方後円墳について

川崎市　下山　昌孝

韓国と日本の古代史を考える場合加羅諸国が在ったとされる洛東江流域が重要である。黒曜石の石器・弥生式土器・甕棺墓・子持勾玉等が発見されていて興味深い。所が最近朝鮮半島南西隅の栄山江流域に、十数基の前方後円墳が発見され、更に弥生前期と同時期の甕棺墓も多数発見されて、日本特に北九州との関係が、注目されている。今年八月に「百済古都と韓国の前方後円墳探訪」の旅に参加したので、栄山江流域の遺跡を中心にその概要を報告する。

一、ソウルの古墳群

ソウル市には、百済王朝初期の古墳群と考えられる石村古墳群がある。高句麗の影響が強い方形積石墳と小円墳があるが、最大規模の3号墳は一辺が約三〇mの正方形であり、集安の将軍塚とほぼ同じ規模であり、時期も同じ五世紀である。

二、公州・扶余近辺の古墳群

百済中期の都城であった熊津（公州）公山城の西側の丘陵上に宋山里古墳群がある。一六基の小円墳が確認されているが、その中程に「百済斯麻王」と書かれた墓誌石や金製冠飾・耳飾りを始め、銅鏡・環頭大刀・翡翠製勾玉（三種の神器）等を出土した武寧王陵がある。

扶余は聖王一六年（五三八）から義慈王二〇年（六六〇）まで百済後期の都城であった。扶余市街地の東に百済後期の陵山里古墳群がある。丘陵の斜面に七基の小円墳の密集する伝王陵群と、東にやや離れている五基の東古墳群が確認されている。いずれも横穴式石室を持つ小円墳であり、金製装身具等を出土している。なお紀元前四世紀と推定される扶余蓮花里遺跡（石棺墓）からは、剣・鏡・曲玉の三種の神器が出土していて注目される。

三、栄山江流域（全羅南道）の前方後円墳

韓半島の南西部、光州市から木浦へ流れる栄山江の流域には、最近の調査によって十数基の前方後円墳が発見されている。その内既に発掘又は測量が行われた古墳が九基ある。光州市西部の光州月桂洞古墳は、全長四五mの一号墳と三五mの二号墳があり、いずれも横穴式石室や周濠を持つ前方後円墳であり、六世紀後半のものと見られている。周濠の中からは円筒土器や朝顔型土器（埴輪）多数が出土した。光州市には、他にも月桂洞二号墳と同規模の前方後円墳・明花洞古墳があり、やはり周濠と円筒埴輪を確認した。（韓国の古墳では周濠を持つのは非常に珍しい）

咸平郡新徳古墳は、全長五一m、円部径三〇mの前方後円墳である。日本の前方後円墳に比べれば小型のものであるが、韓国の古墳としては大型の部類に入る。横穴式石室を持ち、五世紀末の古墳と推定されている。なお咸平郡では、全長七〇mの前方後円墳である竹岩里長鼓山古墳も見学したが、栄山江流域は前方後円墳の密集地帯といえる。

四、栄山江流域の遺跡の特徴

紀元前三〜二世紀の遺跡を見ると、海南郡の貝塚遺跡からは卜骨やゴホウラの貝釧が出土している。古田武彦氏も注目されて調査に行かれた、

咸平郡の草浦里遺跡（石棺墓）からは、いわゆる3種の神器、剣・鏡・曲玉を初めとして、実に多様な遺品が出土している。甕棺は光州市の新昌桐遺跡（BC二世紀）から小型のものが出土しているが、AD二～五世紀には栄山江流域一帯に甕棺墓が盛行する。この時期の甕棺は非常に大型になり、直径八〇㎝前後、長さ一m以上、肉厚が五㎝以上もあるものを、2個水平に組合わせている。

羅州郡潘南面新村里九号墳（AD四～五世紀）は、大型甕棺九基を埋設していた方墳であるが、王墓である事を示す金銅製頭冠、金銅製飾靴、金製耳飾り、曲玉等が出土した。金銅製頭冠は百済様式とは明らかに異なっており、この地方独特のものである。

五、まとめ

韓国南西部の遺跡を見ると、甕棺墓の盛行、前方後円墳の分布中心、弥生土器と似た土器類や曲玉の出土など、北九州との密接な交流を印象付けられるが、日韓考古学シンポジウムでなされた林永珍氏（全南大学校副教授）の講演は更に印象的であった。林氏はソウルおよび全羅南道で長く遺跡調査に携わってこられた方であるが、考古学調査の結果を主体に全羅南道の古代を考えると、次のような解釈が成立するとの説明であった。

（一）栄山江流域の長鼓墳（前方後円墳）は、その墳形、周濠、出土物等から見て、日本人権力者の為に築かれた古墳である事はまず間違いない。

（二）栄山江流域の古墳からは、王権の象徴である金銅製冠が出上しており、この地域に独立した王権が存在したと考えざるを得ない。

（三）『三国志東夷伝』によれば三世紀の三韓の中心は馬韓であった。その後恐らく五世紀前後に百済は急成長し馬韓を圧迫し始める。馬韓は南に圧迫され、全南地区に縮小を余儀なくされたであろうが、両者は暫く並立していた。文献では明確に出来ないが、五世紀以前の全南とその北側の文化相は明確な違いを示しており、考古学的には証明可能である。考古学的に見れば、「馬韓」の滅亡は六世紀中頃と思われる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

馬韓と百済の並立という説は全く画期的であり、六国諸軍事を称した倭の五王についても新解釈を可能にするであろう。

「新・古代学」第一集・読後感

水口　汎

◇

「タクラマカン砂漠の幻の海」（北村泰一教授）は、ロマンあふれる話だった。私は昨年、ウイグル自地区から日本にきていた中国留学生に会う機会があった。この学生（故郷では大学の先生）は、砂漠をボーリングして地層に残る「年輪」を調査し、砂に侵食された昔の生活の跡をたどっていたのである。北村教授の報告は、その学生の話を思い出しまだ見ぬ土地を実感することができた。

それとともに、北村教授が指摘されているように、現地と福岡の地名に残っている水の関係（信州でもそうだが）は、これからも古代の地理的関係を解く上で、そのきっかけの一つになるのではないかと思う。

この中で、福岡の古代の地図が掲載されていた。湾や入江が福岡県の奥深く入っているところを見ると、『魏志倭人伝』の行程についても微調整が必要なのではないかと考える。それというのも、「第一集」に載っていた兼川晋氏の「女王国周辺の地理的考察」研究報告について、この古代地図との整合性はどうなっているのだろうか、と考えたからである。

また、第一集、第二集を通じて、古賀達也氏の「東日流外三郡誌」偽作説反論は、大変な労作で面白く読ませていただいた。偽作説そのものは、まるで根拠のないものにしても、その指摘を反論するために真実を解明する過程で、どんどん新しいことが分かってくるということはまことに痛快。私のような素人にとっては、実に面白く読ませていただいている研究報告である。

私自身は、この問題について、第一集にあった「これほどのエネルギーと膨大なその創作力があればなぜ偽作するのか」という（上岡龍太郎・古田武彦特別対談）　森村誠一発言と同じで、もしこれを偽作というなら、これほどの超天才の作品はないと思っている。

まあ、そんな反語を使うまでもなく、一連の「和田家文書」が真実の書として、なるべく早く刊行されることを心から望んでいる。

皇后が三人づつ

小金井市　斉藤里喜代

「日本書紀」神代の巻に「一書に曰く」という形で五十八個もの一書の引用があることは古田武彦氏の「盗まれた神話」二十二頁の表で皆さん良くご存じであろう。

第五段が最多で十一個あるので、「日本書紀」成立以前に、少なくとも十一種の歴史書があったことになる。

では神武以降はどうであろうか。

神代の巻のまとまった「一書に曰く」はなくなり、割注に「一書に云う」「一に云う」「又云う」という、名前や異説をあげる程度になってしまう。

雄略紀はバラエティに富んで「一本」「一本に云う」「旧本に云う」「別本に云う」「或本に云う」「或云う」として割注がある。

これらは何を意味するのか。

第二代綏靖天皇から第七代孝霊天皇まで、例外なく皇后名の下に二個の割注で、別名が二個あげられている。これは岩波の「日本書紀」の補注（五八一頁）に表になっている。「古事記」の皇后名は「日本書紀」の三つの皇后名のどれかと一致するので（安寧は例外）実質は三人である。

皇后名に別名が二個ついているのではなく、完全に三人の別人が書いてあるのである。

例えば、綏靖天皇は本文「事代主神の女、五十鈴依媛（しき）」、第一・一書「磯城（しき）県主の女、川派媛（かはまた）」、第二・一書「春日県主大日諸の女、糸織媛」の三人である。これら父親名も本人の名も異なる人物が同一人であるはずがない。他の五人の天皇の皇后もすべてこの調子である。

皇后が三人ずつということは、夫の天皇も三人ずついたことになる。そして「古事記」が綏靖天皇は師木（しき）県主の祖、河俣毘売の夫であるといっている。本文の夫と第二・一書の夫は、別系統の歴史書の王者である。

そして第一・一書の安寧・懿徳・孝昭・孝安の四人まで、磯城県主の女を皇后にしていることから、一系統の歴史書だとわかる。これで「日本書紀」「古事記」が出来る前に、三系列以上の歴史書が大和にあったことがわかる。

岩波の補注の表には「一書」とあるが、正確には「一書云」とあるのは綏靖・安寧のみで、第四代以降は「一云」である。これをみると、神代巻の「一書曰」と綏靖・安寧の「一書云」とそれ以降の「一云」はすべてイコールで結ばれて、別の歴史書からの引用である。

「日本書紀」を「古事記」で観察してみると、天皇は第七代までの早い時期でも万世一系とはなっていなかったことがわかる。

つまり「古事記」の皇后が指し示すのは第一・一書系列、川派媛の夫が本物の綏靖で、系列のわからない阿久斗比売の夫が安寧で、第二・一書系列、飯日媛の夫が懿徳で、書紀本文系列妻達の夫が、孝昭・孝安・孝霊天皇であった。

ところで、神武紀には「一云」類はないが、実は、神武と同じ天孫（しるし）族で、天神の子の表の天羽羽矢と歩靫を持っている饒速日の命の妃が名前を三つ持っている。本文が三炊屋媛、そして割注の亦の名で長髄媛、亦の名を鳥見屋媛、そして「古事記」では、登美夜毘売である。これを綏靖天皇の前の天皇として岩波の表に入れるとピッタリはまって怖いくらいである。

やはり長髄媛の夫と三炊屋媛の夫は、大和の別系統の王者であろう。

追記

「新・古代学」第二集九十三頁上段に、和田家文書「荒覇吐神一統史」大邑士佐守の署名で「孝元天皇をして荒覇吐神布せしにも……開化天皇鉄の武器を好みて神器とし、銅なる神器を土に埋めたり」とある。

孝元天皇は第八代天皇で、皇后に異伝はない。九代開化天皇に到って銅鐸、銅剣を土に埋めたという。ここに王権の大断絶を感じるのは私だけだろうか。

皇妃名		書紀本文	一書	一書	古事記
天皇名					
綏靖天皇		事代主神の女 五十鈴依媛	磯城県主の女 川派媛	春日県主大日諸の女 糸織媛	師木県主の祖 河俣毘売
安寧天皇		事代主神の孫 渟名底仲媛	磯城県主葉江の女 川津媛	大間宿禰の女 糸井媛	師木県主波延の女 阿久斗比売
懿徳天皇		息石耳命の女 天豊津媛	磯城県主葉江の男弟猪手の女 泉媛	磯城県主太真 稚彦の女 飯日媛	師木県主の祖 賦登麻和訶比売 亦の名は飯日比売
孝昭天皇		尾張連の祖瀛津世襲の妹 世襲足媛	磯城県主葉江の女 渟名城津媛	倭国の豊秋狭太媛の女 大井媛	尾張連の祖奥津余曾の妹 余曾多本毘売
孝安天皇		姪 押媛	磯城県主葉江の女 長媛	春日の千乳早山香媛	姪 忍鹿比売
孝霊天皇		磯城県主大目の女 細媛	磯城県主葉江の女 渟名城津媛	十市県主等が祖の女 真舌媛	十市県主の祖大目の女 細比売

なにわ・考

青山　富士夫

日本の七・八世紀の文献に出てくる難波とはどうも一カ所ではないのではないか。そういう疑念が、以前から私は漠然とあった。複数の難波のことが、ひとしく大阪の難波のこととして、解釈されているのではないか。現に、最古の百科辞典、倭名抄（十世紀初頭成立）にも、讃岐国寒川郡に、難破の地名がある。

そういう疑問を、私がいっそう深くしたのは、金印の島として有名な博多湾の志賀の島を訪れて、島の志賀の海神社の祭礼に巫女さんたちが唱える神楽歌に、なにわづの語句があることに気がついた時である。

巫女さんたちと言ったが、この人たちは、いつも神社に奉職している専門の巫女ではない。古くからの氏子である島の住民の中の、一定の家柄の婦人が勤める。そういう家が八家あるから、八乙女と言う。乙女とはいうが、女性の生理を卒業した年配者でなくてはならない。そういう、いわば庶民の主婦が、祭の時は巫女を勤めるのである。上記の歌は、その祭事の一つ、四月三日の「田起祭」の時に、古式の舞につれて唱えられる。（「志賀の島の四季　森山邦人著」に採録）

この神楽歌にあるなにわづ、とはどこを指すのであろうか。八乙女さんたちは、祭の時こそ、純白の衣装に緋の袴で、おごそかないでたちになるが、ふだんは島の漁家の主婦である。毎朝、島でとれた新鮮な魚を籠に入れて、博多の町を行商に歩く。それが古くからの島の生活習慣である。そういう素朴な主婦たちの勤める巫女の神楽歌に、遠く見たこともない大阪のなにわづの歌がなじむものであろうか。否、ここに歌われるなにわづは、島の人なら誰にでもイメージのある、おなじみの土地でなくてはなるまい……

どこかこの付近になにわづの痕跡はないかと、私がさがしているうちに、「多元的古代」研究会・九州の灰塚照明氏から、「ありますよ、博多湾にそそぐ樋井川の上流二キロの所に、難波池があります。福岡市内です。」と聞いた。難波池の辺りは、旧名片江村といい、明治のはじめの字（あざ）地名調査記録によると、難波の字名もあり、倉瀬戸、瀬戸口、浦の川など、海辺を示す地名が並んでいるという。有望である。

二万五千分の一の地図を広げて見ると、この辺から東方、那珂川上流にかけて大小の池だらけ、標高もゼロメートルに近いようで、いかにも、昔は海が入り込んでいたと推定しても無理はない。追っかけて、灰塚氏は、住吉神社絵馬による、博多古図を報告された。十〜十一世紀頃の資料に基くものと、灰塚氏は判断しておられる。その古図によると、今の西公園の高地は岬状に突出して、東側に冷泉津、西側には草香江の海が深く入り込んでいる。草香江の奥は、難波池に近い。

この近くに船着場のなにわづがあり、志賀の島のおかみさんたちは、古き昔から、船に魚を積んで、行商に訪れたものと考えてみたらどうであろうか。東に須久岡本、西に吉武高木、弥生時代の顕著な遺跡へも、直線なら五・六キロの距離である。

続いて「なにはづにさくやこの花……」の花について考える。歌詞の趣きから、この花は、早春にいち早く咲く梅の花が最も似つかわしい。諸家もその解釈をとっておられるようである。すると、難波池の西よりの高台のあたりを現在梅林町という。一丁目から五丁目までである。旧地名は梅林村。その命名の由来が、何時までさかのぼれるかは不明であるが、ただいたずらに梅林と呼ばれたわけではあるまい。

また、筑紫を本拠とする傀儡師たちによって、現代まで奇蹟的に伝承されたといわれる「筑紫の舞」のレパートリーの一つ「聖代の栄え」に、

……羽風に散るや花の色香も　なほしはえあるこの里の　難波は梅の花どころ

とする言詞がある（丸山晋二氏採録）。この演目成立の時代も今のところ正確には判定し難いものの、ここでも難波と梅花との、深いかかわりが示されている。

一方、大阪の難波について万葉集を調べてみる。難波の名が見える歌が、集中五十九首ある。その中には、他の難波の可能性のある歌もあるが、大部分は大阪の難波に比定して間違いない。五十九首の中に、梅の花を歌う歌は一首もない。その匂いのかけらもない。万葉集全体で、梅花の歌は一一八首、樹の花では第一位を占めるほど歌われているのに、これではむしろ無さすぎると言うべきで

あろう。そののち、古今集の時代までに、大阪の難波が急速に「梅の花どころ」になったという形跡もうかがえない。

そのように、梅の花とのかかわりから言っても、「なにはづにさくやこの花……」の歌の所縁は、博多の難波に色濃く、大阪の難波とは薄いのである。

「なにはづ」の歌は、古今集（九〇五年）のかな序に、「そへ歌」の見本として引用されていて、専門家の間では有名である。すると、古今集が先か、志賀の海神社の神楽歌が先かという命題が浮かび上がってくる。

旧来の考え方に従えば、古今集から神楽歌へ…が常識というものであろう。私も今、神楽歌のほうが先、とする明証を挙げることはできない。だがしかしである。同じ志賀の海神社で、春秋二回行われる「山ほめ神事」に於て、社人の所作につれて唱えられる「君が代」の唱句が、古今集には「読み人知らず」の賀歌として採録され、明治維新に際して国歌とされるに至ったいきさつは、古田武彦氏らの研究によって、完全に論証されたと言ってよい。（この論証に反応しないのは、現代日本の学問的エネルギーの衰弱、以外の何者でもないであろう。）そうすれば、「なにはづ」の歌も、同じ志賀の海神社の神事に歌われ、ともに万葉集にはなく、ともに古今集に身元不明の歌として登場する。その共通性からも、神楽歌のほうが先、とする観方も、充分に成り立つと考えるのである。（注1）

さらに一つ、状況証拠を挙げよう。

鶯が梅のこすえにひるねしておとろく度に花や散るらん

梅すきて桜をそしき此頃は花やちりしくきのふけふかな

ときはなる松のみとりも春来れば今ひとしをの色まさりける

以上は、「志賀の島の四季」の著者森山邦人氏が、八乙女の手控えから写し取られた一連の神楽歌である。これに先ほどの「なにはづ」の歌を並べてみても、少しも調子の違和感はない。

これに対して、今試みに、万葉集巻五、有名な太宰府長官、大伴旅人邸の梅花の宴の歌を、抜粋して比較してみよう。全三十二首の中から、なるべく、理解の平明な歌を選ぶ。

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来たるらし（八三四）

春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びにあひみつるかも（八三五）

春の野に鳴くや鶯懐けむとわが家の園に梅が花咲く（八三七）

用語の洗練は割り引くとして、こちらは一定の教養が前提となり、歌意は意識的である。これに対して神楽歌のほうは、生活実感そのものを、直接的にリズム化しただけである。「なにはづにさくやこの花……」の歌は、どちらのグループに並べたほうが、似つかわしいのであろうか。

さて、難波があそこにもある、こちらにもあるということになると（注2）、そこに何らかの共通の語義がなくてはならない。これについては先に富永長三氏がユニークな解釈を出された。「な」は魚・菜で食べ物のこと、「には」は広場で、合わせて神前に神撰を供える広場のこととされる。発展して、貢納された産物を集積する場所の義ともなる。他の解釈もあるが、私は今のところ、これが最も納得のいく説であると考えている。そうであれば、何か他の用語例がないものかと探しているうちに、諏訪大社下社に斎庭（ゆにわ）の語があるのを知った。ご存じのように、同社は本殿がなく、一対の杉の大木を神の象徴とする。その二本の杉の木の生えているところを、ゆにわと称している。ゆ（斎）の正確な語義を私は知らないが、なにわとゆにわ、同質のネーミングである。富永説の前進を示すものと考える。

（注1）古今集の古注では、この歌は仁徳天皇が長い間、帝位につかないことをいぶかしんで、学者の王仁が作ったとされているが、付会である。

（注2）別府市の大芝英雄氏は根拠を挙げて、大分県の海岸に難波を想定しておられる。（つづく）

古田武彦氏の原稿予定

古田武彦氏は九月下旬、信州穂高神社で「お船祭り」の取材をなされていて、大きな収穫が期待されます。それを受けて来号に原稿の予定をいただきました。またそのほかにも、新発見があったとのことで、読み応えのある記事になるものと期待されます。お楽しみに！

再び「六月肺出」について

影山　星二

多元第十三号に米田氏のお答えを頂き大変光栄に思っています。以下私の感想を述べさせて頂きます。

結論的に申せばやはり六一七年の彗星はハレー彗星ではなかった。しかし米田氏の調べられた六一五年六月もしくは六一七年六月の彗星がいづれもハレー彗星ではないが「六月肺出」に関わりのある彗星であったのかなということである。

一、日本書紀の六八四年彗星記録への疑問について

米田氏は日本書紀の記述の虚偽性から六八四年の彗星記録に疑問を感じると言われている。しかし六八四年の記録は日本書紀のみでなく中国でもドイツでも記録されており、就中、中国の記録は斉藤氏によると日本書紀とよく一致しているのである。

日本書紀巻二九

天武一三年秋七月二十三日壬申

（六八四年九月七日）彗星西北に出ず。長さ丈余。

旧唐書天文志

唐の文明十三年七月二十二日（六八四年九月六日）西方に彗あり。長さ丈余。凡そ四十九日にて（十月二四日）滅す。

新唐書天文志にもほぼ同文の記載があるがここでは彗星消滅は八月甲辰（一〇月九日）となって旧唐書より十五日早い。

天武四年（六七五）「春正月庚戌（五日）に始めて占星臺を興つ」とありこの時に陰陽寮の名が始めて出てくるが、占星はこのときが始めではなくそれ以前から行われていたものと推察される。

日本書紀巻二二に、

「推古天皇三十六年三月戊申（二日）（六二八年四月一〇日）、日蝕え尽きたり。」とある。これは日本書紀の天文の記事の最初のものである。斉藤氏によるとこの日食は現在の天文学の計算により実在が確かめられ、飛鳥京で〇、九の食分であるという。このほか星食（月の後ろに星がかくれる現象）の記事も舒明十二年（六四〇）を始めとして三件みられる。こうした背景のなかでの六八四年の彗星の記録なのである。たしかに日本書紀の政治的な記事には多くの疑問があるが、天文の記事にまで疑問を及ぼすのは果してよいかどうか。

二、ハレー彗星の周期の研究について

昭和二七年版の縮刷版平凡社大百科事典（原版は昭和七年四月第1刷）に「ハリスイセイ」の項（第一六巻二四三頁）がある。この記事はその後の版の平凡社大百科事典に比較して非常に詳しく、ハリ彗星出現表も載せている。これによると昭和七年頃のハレー彗星に関する知識が読み取れる。

①周期は凡そ七十六年であるが惑星の摂動のためにその回帰には一年半乃至三年位の差を生ずる。

②一六八二年に出現したときハリ（ハレー）はこの彗星の軌道を計算し、これが過去の彗星と同一軌道で約七十六年の周期で楕円軌道上を運行している周期彗星であるという結論を得た。

③その後彗星の過去の出現が精査され表のような回帰が確かめられた。

④最近の出現は一九一〇年であったが、予めの軌道計算により一九〇九年九月に発見され一九一一年七月まで観測された。五月一一日には最も明るく〇・六等、尾は二一日には一二〇度となった。

ここで注目されるのは彗星の周期の変動が昭和七年以前に確認されていること、またこの表の周期は斎藤氏の「星の古記録」（岩波新書）の表（米田氏の論文中にあり）により修正されていることで、現在に至までの不断の研究が読み取れるのである。

資料（一）に両者のデータを纏めてみた。

（つづく）

資料（一）ハレー彗星の回帰状況

NO	平凡社大百科事典 近日点通過	発見日	出現期間	記録	斉藤国治 近日点通過	記録
1	-406/			支	/ /	
2					/ /	
3					/ /	
4	-239/ 4/	5/		支	-240/ 3/30.5	中
5					-163/ 1/20.0	中
6	-86/ 8/	8/		支	- 87/ 8/ 2.5	中
7	-11/10/ 9	8/26	56日	支 欧	- 12/10/ 5.5	中
8	66/ 1/14	2/20	50日	支	66/ 1/26.5	中
9	141/ 3/29	3/27	30日	支	141/ 3/20.0	中
10	218/ 4/ 6	4/	40日	支 欧	218/ 5/17.5	中 欧
11	295/ 4/始	5/	50日	支	295/ 4/20.5	中
12	374/ 2/13	3/ 4	60日	支	374/ 2/16.0	中
13	451/ 7/ 3	4/	90日	支 欧	451/ 6/24.5	中
14	530/11/始	8/29	30日	支 欧	530/ 9/25.2	中 欧
15	607/ 3/末	3/13	100日	支	607/ 3/13.0	中
16	684/ /18	9/ 6	30日	日支	684/ 9/28.5	日中 欧
17	760/ 6/11	5/ 6	50日	支 欧	760/ 5/22.5	中 欧
18	837/ 2/25	3/22	38日	日支 欧	837/ 2/27.5	日中 欧
19	912/ 7/19	7/16	10日	日	912/ 7/ 9.5	日中
20	989/ 9/12	8/12	30日	日支 欧	989/ 9/ 9.0	日中朝
21	1066/ 4/ 1	4/ 2	67日	日支朝欧	1066/ 3/23.8	日中朝欧
22	1145/ 4/19	4/15	80日	日支朝欧	1145/ 4/22.0	日中朝欧
23	1222/ 9/10	9/ 3	60日	日支朝欧	1222/10/ 1.5	日中朝欧
24	1301/10/23	9/14	48日	日支朝欧	1301/10/23.38	日中朝欧
25	1378/11/ 9	9/26	45日	日支朝欧	1378/11/ 9.02	日中朝
26	1456/ 6/ 8	5/27	80日	日支朝欧	1456/ 6/ 9.1	日中朝欧
27	1531/ 8/26	7/31	40日	日支朝欧	1531/ 8/25.8	日中朝欧
28	1607/10/27	9/16	50日	日支朝欧	1607/10/27.50	日中朝欧
29	1682/ 9/15	8/15	35日	日支朝欧	1682/ 9/15.27	日中朝欧
30	1759/ 3/13	前12/25	5ケ月	記録多し	1759/ 3/13.05	日中朝欧
31	1835/11/16	8/ 6	9ケ月	記録多し	1835/11/16.44	日中朝欧
32	1910/ 4/20	前 9/11	22ケ月	記録多し	1910/ 4/20.18	世界各国
33					(1986/2/9.67)	予想

注 1 DC では一年程差がある(4, 6, 7)
2 607年 684年が問題の年(15, 16)
3 1301 年はジオットーの観測(24)
4 1682 年はハレーの観測(29)
5 1910 年は前年の九月から観測(32)

山田宗睦 日本書紀講座

第一九回

アマテラス＝日神の系譜

本文第七段、第二の一書に入る。ここも高天原におけるスサノヲとアマテラスの葛藤がテーマである。スサノヲの乱暴に怒り、体調を崩したアマテラスは天石窟に隠れてしまう。そこで、高天原の神々はその対応に苦慮するが、ついにスサノヲの追放に成功するという話である。

まず注目されるのは、第三の一書もそうだが、アマテラスがすべて日神「尊」と表現されていることである。以前、紹介した北川和秀氏の論文が説いていたように、日本書紀には二系列の資料が使われている。アマテラスを日神と表現しているのは、古事記とは別系統の資料である。この一書では中臣氏への表現が別格になっており、中臣氏系統の資料であることをうかがわせている。

天垣田という名前。これは固有名詞であり、田が珍しかった時代の名残りである。スサノヲはアマテラスのものである天垣田に対し、乱暴・狼藉を働く。姉は寛容な心で弟の乱暴に耐える。ここで「恩親」を《このかみおととむつまし》と読ませている。姉弟の友愛の情を表す意だが、読みには疑問がある。こうした訓読みは平安時代後期以降のことであり、音読みでもいいのではないか。田を縄で囲い込み、田は姉のものではないというスサノヲの行為は正にエンクロージャーであるが、寛容なアマテラスも新嘗の祭りを邪魔されて、ついに堪忍袋の緒を切るのは、ともにこの時代の水田に対する意識を示している。

次に注目されるのは、新嘗に宮を作っていることである。大嘗と新嘗との区別がないことである。毎年の収穫祭である新嘗に対し、平安以後は天皇が即位した時の新嘗を大嘗として区別し、大嘗の場合にのみ宮を作るようになった。「大」の字は天皇の行為につける文字であり、天皇が新嘗を行えば大嘗となる。逆にいえば、新嘗は天皇以前からあった。書紀の二八、二九巻には新嘗も大嘗も頻出するが、両者には区別がない、つまり天武・持統の頃はこういう意識であったことを示している。

また、日神という名のアマテラスを何とか動かそうとして、神々はいろいろな部民の遠祖にいろいろな作業を命じる。その遠祖たちの読みが恣意的である。例えば、天糖戸者の「者」をカミと読ませているのは疑問である。カミは尊、命、神の順にその地位が下がってくるが、者をカミと読めるだろうか。ここでは、中臣氏の遠祖とされる天児屋だけに命という字が使われている。

今回は夏休みを挟んで三カ月振りであった。この間に、先生は北イタリアを旅行された

土産話を披露された。先生の日本書紀・注釈本の第一巻は年末辺りに刊行される予定だそうだが、書紀ばかりやっていると精神のバランスがおかしくなってくるとのこと。西洋哲学育ちの先生はヨーロッパを旅すると、バランスを取り戻すといわれた。小生も昔、サラリーマンになりたての頃、残業やら徹夜が続き、何となく気が変になりそうな時があった。その残業代で本を買って読み、生き返ったような気持がした。その本は、山田先生の訳された（共訳）、ボルケナウの「封建的世界像から市民的世界像へ」であったことを思い出した。それは今も小生の書棚の片隅に鎮座している。（木村　由紀雄・記）

新刊書のお知らせ

◆古田武彦著「神の運命―歴史の導くところへ―」明石書店
予価一六八〇円、九月末発刊。
古田先生の未発表論文と新しい論説の三部により構成。

◆古田武彦編「海の古代史―黒潮と魏志倭人伝の真実―」メガーズ博士（エバンズ夫人）来日記念講演と学術討論、原書房、
予価一八〇〇円、九月末発刊。

●以上二冊については当会で割引き取扱いたします。

◆古田武彦著「親鸞思想―その史料批判」　ながらく絶版になっていたが、このたび明石書店より復刊。　九七八五円

定例活動の報告

富永長三

八月例会云

今月は安藤哲朗、小嶋源四郎両氏のお話。安藤氏は、日頃の漢籍探求の余録の中から「西晋から東晋へ」と題して話された。

爾雅注、穆天子伝注、山海経注等で著名な郭璞。あるいは神仙伝、抱木子等で知られる葛洪等の人物を挙げ、この時代の文化史的寸描を試みて、話は尽きなかったが、いずれまとまった形で発表されるのを期待したい。

小嶋氏は「コシオウ神社について」。このテーマはすでに昨年の「多元」七号での報告と重なる部分もあったにも拘らず、大変興味深い物で、コシオウ（古四王・腰王・古志王等表記される）神社とは、秋田・山形・新潟三県とその周辺に分布圏を持つ、北面する神社。祭神は大彦命、御神体は自然石の場合が多いという。この神社が江戸時代、菅江真澄等によって紹介されて以来今日まで少なくない研究がなされてきた。その淵源については、越王説、四天王説等いまだ定説をみないという。またこのコシオウ信仰の起源は、律令制による国郡制施行以前、古墳時代以前ではないかという。また北面する社殿＝北方信仰とするならば海人族、北の大陸とのつながりをも想定されるという。以上佐藤禎宏氏の「コシオウ信仰研究序説」を紹介され、問題のありようを示された。そして小嶋氏は、安倍比羅夫は越国守の称で表記されること。（斉明紀四年）また発掘された木簡に蒲原郡青海郷（現加茂市）小丁高志君大虫とあること。君（キミ）は王（キミ）の後裔か。等を指摘し、コシオウは越の王に由来すべきかといわれる。さらに今回は、新潟県を中心に秋田市、鶴岡市、会津盆地にいたる分布圏を持つ、火焔型土器・王冠型土器の出土状況に注意を促された。さらなる研究の深化を期待しよう。

万葉と漢文の会云

「み空行く　雲にもがもな　今日行きて　妹に言問ひ　明日帰り来む」

この歌は、巻四・534「…み空行く　雲にもがも　高飛ぶ　鳥にもがも　明日行きて　妹に言問ひ…」と比較される。534は安貴王の歌、その左注に「…於時勅断不敬之罪退却本郷焉…」とあって様々論議される歌だ。だがこの東歌は、明日行きて、ではなく、明日帰り来む、と歌う。つまりこの歌の作者は、明日帰ってこなければならない境遇にあるのではなかろうか。その理由は不明ではあるけれども。それをどう想像するかによってこの歌の背景もちがってこよう。

「青嶺ろに　たなびく雲の　いざよひに　物をぞ思ふ　としのこの頃」

この歌からあと一一首、雲の歌が続く、東国の人々が雲になにを見、何を託していたのか興味深いところだ。この歌、「年のこの頃」について、「この年頃」と解するのと「一年のうちのこの頃」と解する両説あるようだ。後者に理解するならば、青嶺ろ、であるから、秋や冬ではあるまい。春から夏へか。この時期になると、いざよう雲のように心定まらず、もの思いに沈んでしまう、というのであろうか。もの思う対象は異性か。それとも作者にとって忘れ難い何事かがあっての故か。このように大勢で一つの歌をつついていると様々な見方が出される。もちろんそれらが単なる妄想にすぎないのか、はたまた正鵠を射ているのかは別ではあるが。

『隋書』高麗伝は、隋の文帝から高麗の湯に対する長い訓戒の詔勅の終りから。

「……陳叔宝代りて江陰に在り、人庶を残害し……我が辺境を抄掠せり……彼は則ち長江の外を恃み……朕の言に従わず。故に将に命じ師を出し、かの凶逆を除くに、来往旬月に盈たず、兵騎数千に過ぎず……」と陳を滅ぼした力を誇り、湯に対して「王謂うに遼水の広さ長江と如何ぞ。高麗の人陳国と多少ぞ、……宜しく朕の懐いを得、自から多福を求めよ。」と威す。高麗は「湯、書を得て惶恐し、将に表を奉じて陳謝せんとす。會たま病みて卒す。子元嗣ぎて立つ、高祖使いをして元を拝して上開府、儀同三司と為し、……優冊して王と為す。」しかしこの平和はすぐに破られる。「明年、元靺鞨の衆万餘騎を率い遼西に寇す。……高祖聞きて大いに怒り、漢王諒に命じて元帥と為し、水陸を総いて之を討つ。……時に餽運継がず、六軍食乏し、師臨渝関を出で、復た疾疫に遇い、王師振るわず。遼水に次るに及び、元亦惶恐し使を遣はして謝罪し、……元亦歳に遣はして朝貢す。」戦い和し、和してまた戦う。隋滅亡への歯車は回り始める。そして主役の登場を迎える。

「煬帝位を嗣ぎ、天下全盛たり。高昌王・突厥の啓人可汗、並びに親ら闕に詣り貢献す。是に於いて元を徴して入朝せしむ。」しかし元は入朝せず、大業七年煬帝は出兵する。しかしまたも「食尽き師老い転輸継がず、諸軍多く敗績す。」そしていよいよ終幕を迎える。「九年、帝復之を親征す。……諸将道を分ちて城を攻む。會たま楊玄感乱を作す。反書至り、帝大いに懼れ、即日六軍ならびに還る。兵部侍郎斛斯政、亡れて高麗に入れり。高麗具さに事実を知れり。悉く鋭く来追し、殿軍多く敗る。十年、又天下の兵を発するに、會たま盗賊蜂起し、……軍多く期を失す。遼水に至り、高麗亦困弊し、使を遣はして降を乞う。斛斯政を囚送し以て罪を贖う。帝之を許し、……其の降款を受く、……京師に至り、高麗の使者を以て太廟に親告せしめ、因りて高麗の使者を拘留す。仍て元を徴して入朝せしむ、元竟に至らず。帝諸軍に勅して厳装し、更に後挙を図る。會たま天下大いに乱れ、遂に克く復た行れず」と高麗伝は終わる。遂に隋はこれによって滅亡に至る。これを一編の物語として読むのであれば大変面白いのだが、しかしこれは史書だ。たび重なる戦乱に両国の兵士は、また国境の住民達の運命は……思わず感情移入せずには読めない。皆さんはいかがでしょうか。

この先は百済・新羅・靺鞨・琉球国・倭国と続く、ご一緒に読んでみませんか。（読みくだしは安藤氏）

九月例会

下山昌孝氏の「韓国遺跡巡りの旅」の報告、鴨下武之氏の講演報告・「新しい縄文文化像を探る」があった。前者については本号「たろんさろん」欄参照。

◇鴨下氏・「新しい縄文文化像を探る―多摩ニュータウン30年の調査結果をキーワードとして―」は、七月二十二日、多摩ニュータウンを三十年間掘り続けて来られた、東京都教育委員会の「可児通宏氏」の講演の要旨をまとめたものである。普通の遺跡は、掘ったらあったということになるが、多摩ニュータウンの場合、「これだけ掘ったのに出て来なかった。」という点が特徴である。

縄文遺跡は、その様相によってAからFのパターンに分類出来る。

Aは多数の住居と貯蔵穴、墓壙群、中心広場などがあり、出土物も日常品から祭祀用、更に遠隔地から搬入された土器など豊富で、土器の型式が2～3型式以上にわたる長期間続いて生活した痕跡のあるもの。

Bは数棟から数十棟の住居跡があっても、その他の遺構・出土物が少なく、土器の型式も1型式がほとんどで、生活基盤の地ではなく、ベースキャンプの遺跡と見られる。

C～Fは順次小規模になって行く。

多摩ニュータウンの特徴は、Aパターンの遺跡が無かったことである。一方、最近「縄文末期には人口が激減し、弥生人に取って変わられた」とする説が流行しているが、これは次の点で疑問である。

①縄文晩期の高度な文化が、人口激減の状況で起きる筈がない。

②「米」と「弥生人」を混同している。縄文人が弥生人の持ち込んだ技術で、米の栽培は可能である。

③縄文人口の推定方法は、全ての住居数に推定世帯人数を掛けているが、本来Aパターンの住居数のみを使用すべきである。

結論は、縄文文化は縄文人の人口激減によって滅びたのではない。栽培技術の発達等、生活システムが変化して、Bパターン以下の遺跡数が減ったのである。

房総風土記の丘散歩

お知らせ

房総風土記の丘資料館で企画展がある（一一月四日まで「ちば三万年の遺産」）ので、この機会に小グループ見学会を持ちたいと思います。

日時　10月10日（体育の日）

場所　JR成田線安食駅下車→千葉交通バス　風土記の丘下車→徒歩5分

集合　JR上野駅8時56分成田行快速乗車9時40分我孫子発10時8分下総安食着。その他直接資料館へ10時30分～11時頃

資料館　☎0476－95－3126

☞　弁当持参のこと

考古学展示案内

東北の骨角器―桧野照武氏旧蒐品

場所　千代田区神田錦町1－9天理ギャラリー(TEL03-3292-7025)

期間10/7～11／30

東北各地の縄文遺跡出土品の中から福島県と岩手県の骨角器を展示。

『虎塚古墳』秋の公開

場所　ひたちなか市埋蔵文化センター(TEL029-276-8311)

期間　10／31(木)～11/4(月)
　　11/7(木)～11／10(日)

7月7日講演で鴨志田篤二氏が紹介された虎塚壁画古墳の年二回に限定された公開です。

事務局便り

講演会ご案内

◆講演　萩原秀三郎氏「鳥霊信仰の系譜」
10月6日(日)午後1時半より
会場は文京区民センター
萩原氏は最近「稲と鳥と太陽の道」（大修館書店刊）を発刊されたばかりであり、稲や日本人のルーツを探究してこられた民俗学者として、あるいは写真家として著名な方ですが、今回はヒマラヤ山麓での現地調査を踏まえて興味深いお話がうかがえるものと思います。

◆講演　小汀良久氏「再販制度と出版界」
11月3日(日)午後1時より
会場は文京区民センター
小汀氏は新泉社社長、雑誌「新・古代学」や古田武彦氏の数々の著作を発行して来られました。今回は雑誌や書籍の出版にまつわる数々のエピソードを語ります。

◆「日本書紀講座」第三年度
山田宗睦氏の「日本書紀講座」は、9月から第三年度に入っています。山田先生は既に現代語訳の日本書紀（教育社新書）を刊行されていますが、今年からは全三十巻の「日本書紀・史注」（風人社刊）を発刊すべく、精力的に準備を進めておられます。
講座は年間8回の予定で継続しておりまして、巻第一「神代上」を豊富な話題を交えながらじっくり読み進めています。引き続き多数の方々の参加をお願いします。
会費（年間）八千円（但し非会員は一万円）（毎回）千五百円

★「越の国（北陸）遺跡巡りの旅」中止のお知らせ
9月27日(金)～29日(日)に実施すべく、前号にてご案内いたしましたが、残念ながら諸般の事情により中止せざるを得ない事になりました。熱心な多くの方々から早々にお申し込みをいただきながら、このような事態となりました事を深くお詫びいたします。来年は構想も新たに、さらに皆様方に受け入れられる興味深い企画を実現して行くつもりでありますので、引き続きご支援をお願いいたします。

◆新入会会員募集
本会は「古田武彦氏の提唱された、歴史を多元的に観る考え方に賛同し、それを継承発展させる事を理念として、日本の古代の真実の姿を研究」する会です。この様な取組方針に賛同する方々の入会を歓迎します。本会では隔月に機関紙を発行し、また中間月にはハガキニュースをお届けしています。会員による自主的な研究会を毎月開催すると同時に、外部講師を招いての講演会、遺跡調査旅行などを実施しております。入会ご希望の方は、住所、氏名、電話番号を明記の上、入会金（千円）及び年会費（四千円）を、左記へお振込下さい。
＊（郵便振替）多元的古代研究会・関東、口座番号　00170・9・768777

FROM 事務局

◇ちかごろ、『十三経々文』なる本を手に入れました。いわゆる四書五経から左伝まで、周代文書を網羅して、おおむねA5、厚さ7cmばかりの一冊にまとめたもので、極めてコンパクト、ちょっとチェックするのには便利なものですが、読むのには全然向いていないんですね、これが。砂を噛むような感じで。◇「多元」もこんな風にはなりたくないなあ。でも、詰め込んだ遊びのない文章は読みづらいし。先人の手際につくづく敬意を表するきょうこの頃です。
◇もう一つ、『ウイルス進化論』（中原英臣・佐川峻著、ハヤカワ文庫）二〇年も前からウイルスが生物の進化に関係しているという説を引提げて生物学会に提案し続けて来た方で、学説の置かれている立場が古田氏と共通点があって、共感が持てます。
◇所で会員の皆さんの原稿をお待ちしています。論文から漫画まで、何でも◇送り先＊〒232横浜市南区永田みなみ台2―10―401　安藤哲朗まで◇送られる時コピーを取っておいてください。◇以上、哲朗誠惶誠恐、汗顔死罪死罪、謹言。

多元の会カレンダー

会場は全て文京区民センターです

10月

6日(日)　午後1時半
発表と懇談の会　講演　萩原秀三郎氏
「鳥霊信仰の系譜」
13日(日)　午後1時半
山田宗睦先生「日本書紀講座」第20回
27日(日)　午後1時
万葉集と漢文を読む会　万葉集は巻第十四「東歌」、漢文は隋書「東夷伝」を読み続けています。“既成概念にとらわれずに古典を読もう”をモットーに進めています。

11月

3日(日)　午後1時
発表と懇談の会　講演　新泉社社長　小汀良久氏「再販制度と出版界」
10日(日)午後1時半
山田宗睦先生「日本書紀講座」
24日(日)午後1時半
万葉集と漢文を読む会

12月

1日(日)午後1時
発表と懇談の会
発表・木村由紀雄氏「渤海から日本を見る」
青山富士夫氏「人麿の妻・依羅娘子（よさみのいらつめ）考」のお2人です。